

# 1点1点特注で日本国内で作られています

たかだ布の切り方ひとつと思われるかもしれませんが、微妙なカッティングの違いでスーツの出来栄えが左右される非常に大切な工程です。そしてカットされた生地は平面なので、立体的な人間の身体にフィットさせるために生地の“クセ”を取っていくのですが、平均的には2キロ、時は5キロの大きなアイロンで平らな生地を身体の部分に合わせて、伸ばしたり、いせ込んだりして身体の線に沿わせていきこの裁断の工程はようやく終わりを迎えます。



## 4 平面の生地を立体的な人間の身体にフィットさせる

パーツごとにカットされた生地は次に“縫製”の工程に入っていきます。工房を見た事ある方なら分かると思うのですが、裁断の段階だとパーツがバラバラで何を作っているのか全然分からなかったものが、ようやくスーツの形をしてくる。それがこの縫製の工程になります。

耐久性に優れいつまでも型崩れしにくいスーツに仕上がるのかどうか決まるのはこの縫製工程で行われる“芯据え”です。スーツは表の生地だけで出来ているわけではありません。表地と裏地、そして表からは見えない“芯地”で出来上がっているんです。人間でいえば“心臓”にあたるこの芯地。この芯地の良し悪しがスーツの完成度を左右すると言っても過言ではありません。

獣毛で出来た芯に、パス芯と言って馬の毛を使った張りのある芯と胸の部分に弾力を持たすためにフェルト芯を縫い合わせたものを“毛芯”と呼ぶのですが、この毛芯と表生地を1枚の布のように合わせて止めていきます。そして肩や裾、袖、アームホールなどを表地と裏地がなじむように、手作業でまつり付けていきます。平面である布を立体的な人間の身体を丸く包み込み、襟からラペルにかけて流れるようなカーブを描くために、何回も何回もアイロンをかけながら縫製作業を進めていきます。



傍から見れば気の遠くなるような作業が何時間も続きます。中でもシルエットと着心地を決定づける肩のシルエット作りやスーツの顔でもある襟付けの部分は特に慎重に行われます。

## 5 最終仕上げも念入りに

こうして縫製が仕上がった段階で終わりではありません、最終工程である“仕上げ”の工程に入ります。全てのスーツを同じように仕上げていく訳ではありません、最終仕上げは個々の素材に適したプレス条件で、プレス機により最後の仕上げを行います。

そして、最終手アイロンにより立体感のある美しいシルエットのスーツが完成します。

